

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 96 号 令和 2 年 11 月 20 日
編集・発行 神戸市立中央図書館
〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



夕やけ橋

夕やけ橋

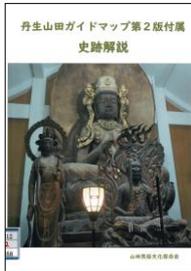
中央区下山手通四丁目、兵庫県庁前の山手幹線に、神戸市の市章がデザインされている歩道橋があります。名前を「夕やけ橋」といいます。

昭和三十年代の日本は高度経済成長により自動車が増加し交通事故による死者数が増加していました。昭和三十四年に日本初の歩道橋が名古屋市近郊に作られ、その後各地の大都市で建設されるようになりました。

「夕やけ橋」は昭和三十八年に川崎重工業によって作られ、市に贈呈されました。十一月三日に完成贈呈式が行われ、学童ら約一万人が神戸市少年団ブラスバンドのマーチに合わせて渡りぞめをしたことが新聞記事になっていきます。歩道橋の名前は市民から募集した結果、「夕やけ橋」に決まりました。橋から眺めた夕やけが美しいことと、兵庫県出身の詩人・三木露風の「赤とんぼ」の歌にヒントを得たものです。

緑色を基調に、パイプのアーチを利用して市章の部分だけを銀色にして際立たせたデザインは、斬新なアイデアの例として、歩道橋についての書籍でよく紹介されています。

参考『あの歌この民話』『人道橋の景観設計』他



ひょうご水百景―五国が紡ぐ 松本幸男執筆 兵庫県土整備部土木局河川整備課監修・発行

県内の河川や池など水辺を取材し、毎月一回発行してきたリーフレットを冊子としてまとめたもの。生田川の記事では、明治初期の付け替えや度重なる災害と復旧を経て現在の姿があることが分かる。また、揖保川に架かる「名畑の流れ橋」を守り、引き継いでいこうとする地元の人々の姿が詳しく描かれ、とても興味深い。

その他にも各地の水辺に係る景観や歴史的・文化的なエピソードが写真、資料を添えて紹介されており、水文化を守り次世代へ継承したいという思いが伝わってくる。

丹生山田ガイドマップ―歴史と文化財を訪ねる 山田民俗文化保存会編集・発行

山田川に沿って走る街道は古く山陽道の裏街道として利用され、地域に第一級の文化をもたらした。今も六條八幡宮の流鏑馬神事や農村舞台など文化財が多く残る。

今回三十五年ぶりに全面改訂、新たに作成された解説冊子では各項が『山田村郷土誌』など参考文献へ紐づけされているのが嬉しい。地図にある自然歩道をたどり史跡と美しい山里風景を楽しみたい。

まつりの古代史―ひょうごの遺跡が語る 大平茂(神戸新聞総合出版センター)

兵庫県で発掘調査に従事しながら、祭祀研究を続けてきた筆者が、県内の発掘資料を駆使して各時代の祭を丁寧に解き明かしていく。

縄文時代の佃遺跡(淡路市)から出土した石剣は太陽観測に用いられたのか、銅鐸の出土からみたら祭とは?古墳から出土したミニチュア土製品の用途は何かなど、組上に挙げられた難解な題材を著者が手ほどきし、考古学(祭祀研究)をわかりやすく教えてくれる。

明石城 なぜ、天守は建てられなかったのか 神戸新聞明石総局編(神戸新聞総合出版センター)

明石城は、昨年に築城四〇〇年を迎えた。東西約三八〇メートルの石垣と、二棟の櫓は多くの人の心を引き付けるが、この城には天守がない。それはなぜだろうか。

天守が建てられなかった理由をはじめ、廃城令で解体の危機にあった明石城を救った元藩士たちの活躍、黄金の襖絵がたどった数奇な運命、城下町の発展など、明石城の謎に迫っている。

最後の社主―朝日新聞が秘封した「御影の令嬢」へのレクイエム 樋田毅(講談社)

村山美知子氏は朝日新聞社の創業者のひとりである村山龍平氏の孫であり、社主、大株主であった。朝日新聞社から派遣され、七年間にわたり秘書役として仕えた元社会部記者が目にした社主の華麗な暮らしぶりや人となりを伝える。

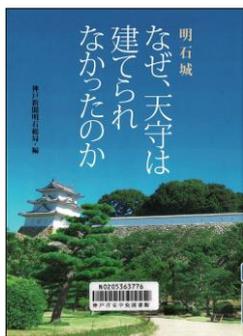
やがて朝日新聞の経営を左右する社主の持ち株をめぐって、会社との軋轢があらわになる。著者は、高齢の社主、創業者一族に迫る非情な現実をつぶさに語る。

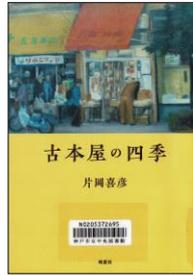
筆跡をきく―手記執筆者のはなし 高森順子、阪神大震災を記録しつづける会編集・発行

阪神大震災を記録しつづける会は、公募で寄せられた被災手記をまとめ、一九九五年から継続して発行してきた。

十二集目の本書は、これまでの執筆者のうち六人にインタビューを行い、「あなたにとって書くという行為とは?」と問いかける。「我が子が生きていたことを形に残したかった」、「口に出すことはできなかつたが書くことならできた」など執筆者の声は様々である。

インタビューと共に過去の手記もあわせて掲載されており、書き手の人柄や思いがにじみ出ている。





古本屋の四季 片岡喜彦 (皓星社)

兵庫区神田町にある「古書片岡」。その店主である著者は、定年退職後に夢であった古本屋を開業した。本書は、著者が書評誌『足跡』に書き継いできた文章をまとめたもので、店の番台から眺めた「古書片岡」の日常が綴られている。「本好きの人・本・心つなぐ店」をモットーに、著者は本を売ることに以上に、本を引き取って次の縁に繋げることを大切にしている。家まで本を引き取りに行き、時には客の人生相談に乗ることもあるという。

鉄の華—美しき下町工場の侍 長谷川佳江 (書肆山住)

神戸育ちのカメラマンが、二年にわたって長田区の鉄工所を訪ね歩き、熟練職人たちの仕事ぶりを撮影したモノクロ写真集である。

町工場は今、仕事の減少や後継者問題など厳しい状況にあるが、それでも己の技術を武器に黙々と仕事に打ち込む姿を、著者は現代の「侍」と見立てて写し出す。

写真は全七十枚。長年、ものづくりに励んできた彼らの真剣な表情に、誰もが心動かされるはずだ。

猫を棄てる—父親について語るとき 村上春樹 (文藝春秋)

十二歳まで夙川で暮らしていた著者は、ある夏の日、父と二人で猫を棄てに行ったことがあった。

著者の父は、寺の息子として生まれ、俳句を詠み、日々の読経を欠かさなかったという。晩年までは二十年以上の間、疎遠であったが、二人を繋ぐこの共有体験が、本作の執筆を支えた。

生前あまり語られなかった父の兵役中の足跡をたどる。時代に翻弄された一人の人間と、その息子としての著者を感じられる。

|| その他の新刊 ||

命のうた—ぼくは路上で生きた十歳の戦争孤児 竹内早希子 (童心社)

神戸外大教師が新入生にすすめる本
神戸市外国語大学編 (神戸新聞総合出版センター)
耳朶ぎ目朶ぎ たかとう匡子 (思潮社)

神戸 その20
あんな人こんな人

東山 魁夷 ひがしやま・かい
明治41年(1908年)~平成11年(1999年)



「『明るい市民の街』というイメージが、神戸を想う時、いつも私の胸に浮びます。」画家・東山魁夷は、1981年に開催された神戸ポートアイランド博覧会での自身の展覧会に際して、幼少期を過ごした神戸をこのように述べています。3歳の時に魁夷は父親の仕事の都合で横浜から神戸へ引っ越してきました。兵庫県立第二神戸中学校(現・兵庫高等学校)を卒業した後は、東京美術学校(現・東京藝術大学美術学部)やヨーロッパで本格的に絵を学び、「残照」や「道」、唐招提寺の壁画などの名作を生み出していきます。

阪神・淡路大震災の際には、被害を受けた神戸国際会館の再建にあたり、こくさいホールの大帳を手掛けました。大帳に描かれている「新生の樹」について、「樹々は、いつもエネルギーを蓄えていて、春になると恵みの緑をふりかけていく。地上の全てのものに新しい元気と勇気を与えながら『さあ!進もう。明日に向かって、しっかりと』と合唱しているようだ。」という言葉を残しています。東山魁夷がふるさと神戸を思い描いた「新生の樹」は、今もなお神戸市民の文化・芸術の場を彩り続けています。



写真:『東山魁夷・東と西を結ぶ展』(神戸ポートアイランド博覧会協会、神戸新聞社)、『神戸国際会館50年史』(神戸国際会館)

市役所庁舎の移りかわり

三宮の都心再整備に伴い、市役所の二号館・三号館が立て替えられました。二号館は、昭和三十二年に四代目の市役所として、建設されました。今では、神戸市役所といえは三宮の海側、東遊園地の傍にあるものという印象が強いですが、初代から三代目までの市役所はそれぞれ違う場所にありました。

初代の市役所は木造で、現在の中央区相生町、JR神戸駅の北東にありました。元々は明治二十年一月に神戸区役所として建てられたもので、明治二十二年の市制実施にあたり、神戸市役所と改称し、同年六月二十一日に開庁式が挙行されました。

誕生時の神戸市は、神戸区に菟原郡葺合村と八部郡荒田村を併せた、現在の市域から見れば中央区と兵庫区の一部にあたる地域でした。明治二十九年に八部郡湊村、林田村、池田村と合併し、人口が増え行政組織も拡大します。それに伴い、元区役所だった建物では手狭になり、二代目市役所の建設が計画されます。

二代目市役所は、明治四十二年十二月に、現在の中央区橋通の神戸地方裁判所東隣に煉瓦造りの三階建てで新築されました。二代目市役所時代、神戸市はさらに周辺の町村と三度合併し、市域を拡大し発展していきます。そのため、行政の仕事も職員も、市役所本庁舎内には収まらなくなっていました。昭和二十年九月、建物に空襲の影響があったこともあり、事務効率も悪く市民にも不便であった分庁舎などを集約するため、移転することになります。



『神戸：大神戸市を中心とする名所鳥瞰図絵』部分

三代目の市役所は、神戸市立第一高等女学校(現在の湊川中学校の地)および、湊川公園内にあった勸業館を転用したものでした。校舎であった建物は、不便で狭く、結局、各部署を集約することはできず、十数カ所に分散していました。また、大空襲で多くの学校が被災したことや、学制改正の影響で校舎が不足してい

たこともあり、敷地の返還を求められ、新しい市役所を別の場所に建設する必要がありました。

しかし、財政的に難しくなかなか建設には至らず、昭和二十九年年度予算でようやく総合庁舎建設費が計上され、同年五月には神戸市庁舎建設調査会が設置されました。候補地として示された相楽園、旧小野浜外国人墓地跡、大倉山公園、湊川神社北側、東遊園地の五カ所について検討が始められ、昭和三十年一月に建設予定地は東遊園地と決定され、三月に工事が始まりました。東遊園地は、元は旧外国人居留地でしたが、返還時に国有地となり、その後、区画整理の換地で市役所の敷地として使用できるようになりました。

昭和三十二年四月に、四代目市役所が完成し、本庁舎の南側には市会議事堂も建てられました。しかし、行政組織の拡大は続き、またも庁舎は手狭となり、昭和四十一年九月、本庁舎西隣に分庁舎が建設されました。市制一〇〇周年の平成元年には、市会議事堂の場所に高層の庁舎(一号館)が建てられ、市会議事堂はその二十九階に移りました。そして、四代目市役所は二号館、分庁舎は三号館と呼ばれるようになりました。

解体される二号館は、阪神淡路大震災で被災し六階部分が押しつぶされたため、改修工事を行い平成八年三月より五階建てで使用されていましたが、当初は八階建ての建物でした。平成二十四年三月には、三号館の西側に危機管理センター(四号館)が竣工しました。



実は、市役所の歴史は、図書館の歴史にも関係があります。市役所が橋通の二代目の建物に移転した後、相生町の初代市役所の建物には改築工事が施され、明治四十四年十一月十日に最初の神戸市立図書館となります。その後、大正十年十一月十日に、現在の中央図書館のある大倉山(中央区楠町)に移転するまで図書館として利用されました。初代市役所と、初代市立図書館は同じ建物を使用していたのです。

参考文献

『新修神戸市史 行政編』、『神戸市史 第三集 行政編』、『神戸市教育史 第二集』、『神戸市立図書館60年史』他